

臨床実地問題 50 問(解答時間 2 時間)

- 1 右眼に付着する外眼筋を耳側から見た図を別図 1 に示す。
正しいのはどれか。
a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 2 1 歳の男児。ぐったりしていることに母親が気づき小児科を受診した。理学的所見はなく、眼科に眼底検査の依頼があった。左眼眼底写真を別図 2 に示す。
まず行うべき検査はどれか。2 つ選べ。
a 心電図 b 血液検査 c 頭部 CT d 胸部 X 線検査 e 腹部エコー検査
- 3 78 歳の女性。左下眼瞼の霰粒腫が治りにくいと近医から紹介されて来院した。半年前からあるという。外眼部所見と切除標本を別図 3A, 3B, 3C に示す。
正しいのはどれか。
a 脂腺癌 b 扁平上皮癌 c 悪性黒色腫 d 基底細胞癌 e 悪性リンパ腫
- 4 ある視覚補助具を別図 4A, 4B に示す。
誤っているのはどれか。
a 視野が狭くなる。 b 焦点深度が浅くなる。 c 遠用にも近用にも使える。
d 接眼レンズは凸面である。 e ガリレオ式弱視眼鏡である。
- 5 37 歳の女性。半年前から両上眼瞼が徐々に腫れてきたため来院した。普段はハードコンタクトレンズを使用しているが特に支障はない。副鼻腔炎の既往がある。初診時の顔面写真と眼窩 MRI を別図 5A, 5B に示す。
考えられるのはどれか。
a 眼窩蜂巣炎 b 前頭洞嚢腫 c 涙腺多形腺腫 d Sjögren 症候群 e IgG4 関連眼疾患
- 6 10 歳の男児。1 か月前から両眼の充血と流涙および強い異物感を自覚しており、開瞼できないため小学校を欠席している。アトピー性皮膚炎と気管支喘息で通院中である。前眼部写真を別図 6 に示す。
この疾患を患者に説明するときの内容で正しいのはどれか。
a スギ花粉症の一種です。
b 舌下免疫療法は有効です。
c 思春期になると治癒します。
d 副腎皮質ステロイド局所注射は即効性があります。
e シクロスポリン点眼薬で登校できるくらいよくなります。
- 7 70 歳の女性。左眼の異物感を主訴に来院した。左眼前眼部写真を別図 7 に示す。
治療はどれか。
a 非ステロイド性抗炎症薬点眼 b 副腎皮質ステロイド点眼 c 穿刺術
d 切開術 e 摘出術
- 8 75 歳の女性。慢性的な眼不快感を主訴に来院した。前眼部写真を別図 8 に示す。
誤っているのはどれか。
a 両眼性が多い。 b 結膜下出血と関連がある。
c 間欠的な流涙の原因となる。 d 涙嚢鼻腔吻合術の適応である。
e 球結膜と強膜の接着不良により生じる。

9 33 歳の男性。両眼の羞明と異物感を主訴に来院した。左眼前眼部写真と角膜病変の生検組織像を別図 9A, 9B に示す。

診断はどれか。

- a 角膜フリクテン b Salzmann 結節変性 c 格子状角膜ジストロフィ
d 顆粒状角膜ジストロフィ e 膠様滴状角膜ジストロフィ

10 67 歳の男性。右眼の視力が徐々に低下したため来院した。前眼部写真と角膜形状解析の結果を別図 10A, 10B に示す。

診断はどれか。

- a 円錐角膜 b 後部円錐角膜 c Mooren 角膜潰瘍
d Terrien 辺縁角膜変性 e ペルーシド辺縁角膜変性

11 39 歳の男性。右眼の視力低下が進行したため全層角膜移植を行った。ホスト角膜片の組織像を別図 11A, 11B, 11C に示す。

診断はどれか。

- a 円錐角膜 b 水疱性角膜症 c 外傷性角膜穿孔
d 斑状角膜ジストロフィ e Reis-Bücklers 角膜ジストロフィ

12 76 歳の女性。Fuchs 角膜内皮ジストロフィによる水疱性角膜症に対して角膜内皮移植術を施行した。術翌日の前眼部写真を別図 12 に示す。

最も適切な対応はどれか。

- a 前房洗浄 b 腹臥位の保持 c 創口の再縫合 d 前房内空気注入 e 抗菌薬の頻回点眼

13 36 歳の女性。頻回交換ソフトコンタクトレンズを装着しているが、異物感を訴えて来院した。左眼前眼部写真とフルオレセイン染色写真を別図 13A, 13B に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a ドライアイ b カタル性浸潤
c アカントアメーバ角膜炎 d スマイルマークパターン
e superior epithelial arcuate lesions (SEALS)

14 82 歳の女性。左眼の充血と疼痛、視力低下を主訴に来院した。初診時視力は右 0.6(1.0×-2.00 D)、左 0.1(0.2×-2.50 D)。眼圧は右 17 mmHg、左 28 mmHg。Hertel 眼球突出計で右 13 mm、左 19 mm。25 年前に白内障手術を受けている。初診時の前眼部写真と眼窩 CT を別図 14A, 14B に示す。

治療法で正しいのはどれか。

- a 抗菌薬点眼 b 瘻孔塞栓術 c 線維柱帯切除術
d 毛様体冷凍凝固 e ステロイドパルス療法

15 68 歳の女性。10 日前から左眼の中心暗点を訴えて来院した。視力は左 1.2(1.5×-0.25 D)。左眼眼底写真と蛍光眼底造影写真(造影早期と後期)および OCT 像とを別図 15A, 15B, 15C, 15D に示す。

正しいのはどれか。2 つ選べ。

- a 慢性期の所見である。 b 橙赤色隆起病巣がみられる。
c 光線力学療法の適応がある。 d レーザー光凝固の適応がある。
e 硬性白斑は主として内網状層にみられる。

16 48 歳の男性。最近体調がすぐれず、10 日前から両眼の焦点がぼやけてきたため来院した。視力は右 0.1(0.3×cyl-0.75 D Ax 180°)、左 0.1(0.2×cyl-0.75 D Ax 115°)。内科は受診していない。両眼の眼底写真と OCT 像を別図 16A, 16B に示す。

この症例でみられるのはどれか。2 つ選べ。

- a 高血圧 b 高血糖 c 肝機能低下 d 網膜新生血管 e 急性 Elschnig 斑

17 8歳の女児。暗所でつまずきやすいとのことで来院した。視力は右0.9(1.2×+0.75 D ⊂ cyl-0.75 D Ax 170°), 左0.8(1.2×+0.75 D ⊂ cyl-1.00 D Ax 180°)。右眼眼底写真とOCT像を別図17A, 17Bに示す。左眼も同様の所見である。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 中心窩網膜は肥厚している。
 - b photopic ERGは末期まで保たれる。
 - c 我が国では常染色体優性遺伝が最も多い。
 - d 我が国での発病率は40,000~80,000人に1人である。
 - e 暗順応ではKohlrauschの屈曲点の消失がみられる。
- 18 18歳の男子。幼少時から視力不良で、複数の眼科を受診したが原因不明と言われて来院した。視力は右0.3(矯正不能), 左0.6(矯正不能)。両眼の眼底写真とOCT像とを別図18A, 18Bに示す。

この疾患で正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 遠視が多い。
 - b 夜盲がある。
 - c ERGが診断に役立つ。
 - d 眼底の周辺部に異常はない。
 - e この患者の子供が男であれば約半数が保因者となる。
- 19 50歳の男性。左眼の飛蚊症を訴えて来院した。10年前に高血糖と尿糖を指摘されたが放置していた。視力は両眼ともに1.0(矯正不能)。眼圧は右16 mmHg, 左29 mmHg。左眼の虹彩と隅角および眼底写真を別図19A, 19B, 19Cに示す。

適切な治療はどれか。

- a 硝子体手術
 - b 汎網膜光凝固
 - c 線維柱帯切除術
 - d 毛様体冷凍凝固
 - e 副腎皮質ステロイド硝子体内注射
- 20 6歳の女児。左眼の視力不良で紹介された。視力は右1.2(矯正不能), 左0.02(0.04×-4.50 D ⊂ cyl-3.00 D Ax 180°)。左眼には水晶体後面に白色物を認める。左眼眼底写真を別図20に示す。右眼に異常はない。

正しいのはどれか。3つ選べ。

- a 遺伝性
 - b 小眼球
 - c 眼位異常
 - d 毛様体突起の短縮
 - e 13番染色体トリソミーの合併
- 21 3歳の女児。3歳児健診で視力不良を指摘されて来院した。左眼眼底写真を別図21に示す。診断はどれか。
- a Coats病
 - b 骨腫
 - c 悪性黒色腫
 - d 網膜芽細胞腫
 - e 黄斑コロボーマ

22 摘出眼球の病理組織標本の弱拡大像と強拡大像を別図22A, 22Bに示す。

正しいのはどれか。

- a 全身化学療法が奏効する。
- b 重粒子線治療が行われる。
- c リニアック放射線の感受性が高い。
- d メトトレキサートの硝子体内注射が行われる。
- e マイトマイシンCの選択的眼動脈注射が行われる。

23 41歳の男性。以前より両眼の霧視を自覚することが何度かあったが、その都度自然に回復していた。今回、検診目的で来院したが、初診から7日目に左眼の視力低下を自覚したため再診した。初診時と再診時の眼底写真を別図23A, 23Bに示す。

正しい治療はどれか。

- a コルヒチン内服
- b ステロイドパルス療法
- c 抗真菌薬硝子体内注射
- d 抗VEGF薬硝子体内注射
- e アセチルスピラマイシン内服

24 生後10か月の乳児。生まれつき眼の色が左右で異なることを主訴に来院した。顔面写真を別図24に示す。

この疾患にしばしば合併する異常はどれか。

- a 難聴
- b 低身長
- c 白内障
- d 緑内障
- e 立体視不良

- 25 2歳の男児。眼位の異常を訴えて来院した。両眼の眼底写真を別図 25A, 25B に示す。
正しいのはどれか。
a 両眼とも高度の視力障害が予想される。 b 聴覚検査を行う。 c 化学療法を行う。
d 硝子体手術を行う。 e 左眼は眼球摘出を行う。
- 26 29歳の女性。右眼の痛みと霧視を訴えて来院した。視力は右 0.01(矯正不能), 左 1.2(矯正不能)。眼圧は右 34 mmHg, 左 13 mmHg。初診時と2年後の前眼部写真を別図 26A, 26B に示す。
考えられる病原体はどれか。
a 淋菌 b 真菌 c 緑膿菌 d アカントアメーバ e 水痘帯状ヘルペスウイルス
- 27 25歳の男性。右眼に鈍的外傷を受けたため来院した。9方向眼位写真とMRI画像を別図 27A, 27B に示す。
診断はどれか。
a 上直筋断裂 b 下直筋断裂 c 外転神経麻痺 d 動眼神経麻痺 e 眼窩吹き抜け骨折
- 28 53歳の女性。両眼の視力低下を訴えて来院した。視力は右 0.3(0.6× +2.50 D ⊂ cyl-1.25 D Ax 85°), 左 0.1(0.6× +2.75 D ⊂ cyl-1.50 D Ax 135°)。眼圧は右 10 mmHg, 左 9 mmHg。12年前から全身性エリテマトーデスに対して長期ステロイド内服加療中で、現在もプレドニゾロン 10 mg/日の内服をしている。両眼の眼底写真と蛍光眼底造影写真を別図 28A, 28B に示す。
考えられる原因はどれか。
a 全身性エリテマトーデスの増悪 b 真菌性眼内炎 c 糖尿病網膜症
d APMPE e MPPE
- 29 4歳の男児。時々物が二つに見えると訴えて来院した。両眼に近視があり、眼鏡矯正下で5m先のLandolt環を視標としてプリズム交代遮閉試験で正位、両眼に-2.00 Dのレンズ負荷で25Δの内方偏位を認める。眼鏡矯正下の近見眼位を別図 29 に示す。
適切な治療はどれか。
a 健眼遮閉 b 内直筋後転術 c 調節麻痺薬の点眼
d 累進屈折力レンズの処方 e フレネル膜プリズムの処方
- 30 眼位矯正用の眼鏡を別図 30 に示す。
適応となるのはどれか。
a 固定内斜視 b 調節性内斜視 c 麻痺性内斜視 d 間欠性外斜視 e 麻痺性外斜視
- 31 3歳の女児。3歳児健診で左眼の視力不良を指摘されて来院した。視力は右 0.5(0.7× +1.00 D ⊂ cyl+1.50 D Ax 90°), 左 0.1(0.3× +2.50 D ⊂ cyl+1.75 D Ax 80°)。前眼部と中間透光体および眼底に異常はない。眼位写真を別図 31 に示す。眼振および眼球運動制限は認めない。頭部CTに異常はない。
適切な治療はどれか。
a 1日2時間の右眼遮閉
b 1日6時間の右眼遮閉
c アトロピン硫酸塩点眼後の他覚的屈折検査による完全矯正眼鏡
d シクロペントラート塩酸塩点眼後の他覚的屈折検査による矯正眼鏡
e シクロペントラート塩酸塩点眼後の自覚的屈折検査による矯正眼鏡
- 32 30歳の女性。1か月前からの右眼の視力低下で来院した。頭痛も訴えている。視力は右 0.1(矯正不能), 左 0.9(矯正不能)。両眼の眼底写真を別図 32 に示す。
考えられる疾患はどれか。
a 下垂体腺腫 b 鞍結節髄膜腫 c 嗅神経髄膜腫
d 視神経鞘髄膜腫 e 抗アクアポリン4抗体陽性視神経炎

- 33 45歳の男性。両眼の視野欠損を指摘されて来院した。右眼眼底写真と自発蛍光写真を別図 33A, 33B に示す。この症例の超音波 B モード検査所見は別図 33C のどれか。
a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 34 85歳の男性。右眼の霧視を主訴に来院した。側頭部痛があり、顎のあたりまで痛い。視力は右 0.1(矯正不能)、左 1.2(矯正不能)。右眼は相対的瞳孔求心路障害(RAPD)陽性。眼球運動に異常はない。赤沈は 1 時間値 115 mm。初診時の眼底写真と右眼蛍光眼底造影写真および側頭動脈の生検組織像を別図 34A, 34B, 34C に示す。
適切な治療はどれか
a 経過観察 b 眼窩減圧術 c 網膜光凝固
d 高圧酸素療法 e 副腎皮質ステロイド大量点滴静注
- 35 31歳の女性。複視と右上眼瞼の腫脹および疼痛を主訴に来院した。造影 MRI T₁強調画像を別図 35A, 35B に示す。
みられる所見はどれか。2つ選べ。
a 右眼下転制限 b 右眼瞼裂開大 c 右眼眼圧上昇 d 両眼上転制限 e 右動眼神経麻痺
- 36 89歳の女性。起床時に生じた眼瞼下垂を主訴に来院した。2~3日前に頭痛を自覚している。高血圧や糖尿病などの既往はない。顔面写真と瞳孔および眼位写真を別図 36 に示す。下方視時の眼球回旋はみられず、全身には神経学的な異常を認めない。
正しいのはどれか。
a 経過観察 b 頭部 MRI の予約 c テンシロンテスト
d ビタミン剤の処方 e 直ちに脳神経外科へ紹介
- 37 緑内障の Humphrey 視野計の 10-2 プログラムによる結果を別図 37 に示す。
左眼の測定結果はどれか。2つ選べ。
a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 38 85歳の女性。昨夜から眼痛があり改善しないため来院した。眼圧は右 48 mmHg, 左 14 mmHg。20%マンニトール点滴静注と眼圧下降薬の点眼治療で、右 18 mmHg, 左 10 mmHg に下降した。右眼前眼部写真と前眼部 OCT 像を別図 38A, 38B に示す。
最も適切な治療法はどれか。
a 副腎皮質ステロイド点眼による消炎治療 b ピロカルピン塩酸塩点眼による経過観察
c レーザー虹彩切開術 d 白内障手術
e 線維柱帯切除術
- 39 6歳の男児。友人の頭に自分の頭の右側が激突して、気分不良となり来院した。視力は両眼ともに 1.0(矯正不能)。複視の自覚はない。受傷時の顔面写真と眼窩 CT(軸位断、冠状断)を別図 39A, 39B, 39C に示す。
処置および生活指導で正しいのはどれか。
a 緊急手術を行う。 b 圧迫眼帯をする。 c 鼻を強くかませない。
d 仰臥位で寝かせない。 e できるだけ唾を飲み込ませる。
- 40 16歳の男子。昨日テニスボールが左眼に直撃し、視力低下を自覚して来院した。視力は左 0.2(0.3×-1.50 D)。眼圧は左 16 mmHg。左眼眼底写真と OCT 像を別図 40A, 40B に示す。
適切な治療はどれか。
a 経過観察 b 硝子体手術 c 光線力学療法
d 抗 VEGF 薬硝子体内注射 e 副腎皮質ステロイドテノン嚢下注射

49 60歳の男性。右眼は約1年前に増殖糖尿病網膜症のために他院で数回の手術を受けた既往がある。今回、右眼眼圧高値で紹介された。視力は右0.02(矯正不能)。眼圧は右28 mmHg。上方隅角写真を別図49に示す。

眼圧上昇の原因で最も考えられるのはどれか。

- a 続発閉塞隅角緑内障 b 乳化シリコンオイル c 液体パーフルオロカーボン
d トリアムシノロンアセトニド e ghost cell glaucoma

50 35歳の男性。10日前から左眼に眼痛があり、数日前から視力低下が増悪したため来院した。視力は右1.5(矯正不能)、左0.2(矯正不能)。眼圧は右15 mmHg、左25 mmHg。左眼前眼部写真と眼底写真を別図50A, 50B, 50Cに示す。

まず行うべき適切な対応はどれか。

- a 硝子体手術 b 眼内抗菌薬投与 c 前房水の細菌検査
d 前房水のウイルスPCR検査 e 硝子体液のIL-6, IL-10測定